

松村通信第72号特別号

2010年1月15日
2月25日一部改訂
松村勝弘

定年を迎えて

「松村通信」と称して、時に思うところを書いている。その第1号は1998年1月18日である。思い起こせば、私とその前年1997年に『日本の経営財務とコーポレート・ガバナンス』（中央経済社）を書き上げ、これに注力している間に日本経済は激動し始めた。97年北海道拓殖銀行、山一証券と相次いで破綻し、98年には日本長期信用銀行、日本債券信用銀行が経営危機に陥り国有化された。そんなさなか、社会人学生の皆さんと学習会をしていたが、この人たちに発信し始めたのが「松村通信」であった。その第1号の表題は「日本は第2の敗戦か」というものであった。まさに日本が金融敗戦を被り経済が浮遊し始めた時期だった。今から思えば「金融立国」で復活し始めたアメリカに、日本が「金融敗戦」したのが、この時期であった。その後の「松村通信」でこの問題をしばしば取り上げたものだ。

ところが今、その「金融立国」で復活したアメリカが地震源となって、世界的金融危機が起こり、実物経済も大きな打撃を受けた。とりわけ日本経済はこれにおそわれて呻吟している。いったい何が起こったのか。「松村通信」第71号と重複するところもあるが、今回定年を迎えて、恥ずかしながら、書き殴ってみた。最近のビジネス書を読む中で合理的経済人モデルの限界を考え、われわれの生き方にも踏み込んで考えてみたい。

合理的経済人モデルや分析的学問の限界

リーマン・ショックを受けて、それまで全盛を極めていた新古典派経済学を基礎にしたファイナンス論への不信感が高まっている。また金融工学という数学確率論がこの金融バブルの主役であったといわれて、金融工学にも逆風が吹いている。2009年ノーベル経済

学賞も新古典派ではなく制度派のオリバー・ウィリアムソンに付与された。新古典派経済学が想定している人間は、よく「合理的経済人」であると言われる。実はかつてのマルクス主義の時代であれば、「範疇としての資本家」が想定されていた。森島通夫『思想としての近代経済学』岩波新書、1994年、はこれらをひとくくりに同じ次元のものとして捉えていたのを思い出す。

そのような合理的経済人モデルの限界を指摘する向きも増えてきている。リチャード・セイラー及びキャス・サンスティーン著、遠藤真美訳『実践行動経済学』日経BP社、2009年にしても、ナシーム・ニコラス・タレブ著、望月衛訳『ブラック・スワン』（上・下）ダイヤモンド社、2009年にしても、合理的経済人モデルの限界を克服しようとしている。

実践行動経済学 『実践行動経済学』を読むとどうして人間が思い違いをしがちかを教えてくれる。人間が決して合理的存在でないことを、いろいろな例をあげて教えてくれる。人間というものは「計画を実行するのに必要な時間を過度に楽観的に見積もってしまう体系的な傾向を」（20頁）もっている。だからこそ私なども、仕事を安請け合いして後から大あわてでつじつまを合わせる。なぜこうも慌てなければならぬかは、この箇所を読んで納得した。行動ファイナンスでは常識となっているけれど、「ものを失う“痛み”は得る“喜び”の2倍」だという。人は「損失回避的」だという（59頁）。だから、株価が下がったとき、損失の実現を先送りして、さらに痛い目に遭う。人間はそういうもののようなのである。また、ブームが来て「メディアが楽観論を支持すると、人々は自分たちは『新しい時代』にいるのだと思い込み、フィードバック・ループが株価の一段の上昇をもたらす。」（109頁）そういえば、ITバブルの最中「ニュー・エコノミー」なる言葉がはやったのを

思い出す。日本の 1980 年代後半のバブルのときは「新人類相場」といったことも思い出す。人間の不合理性に思いを致さねばならない。著者は「強欲さと腐敗は今回の金融危機の一端をになったが、人間なら誰もがもつ弱さが与えた影響も非常に大きかった。人間の弱さを知り、限定合理性、自制心をめぐる問題、社会的影響が甚大な影響を与える危険性があることを理解せずに、強欲さ、腐敗、悪行を非難するだけでは、金融危機は防げないだろう」と結論するのである(379 頁)。

ブラック・スワン 『ブラック・スワン』は極めて興味深い著書である。「ブラック・スワン(黒い白鳥)とは、まずあり得ない事象のことであり、次の三つの特徴を持つ。予測できないこと、非常に強い衝撃を与えること、そして、いったん起こってしまうと、いかにもそれらしい説明がでっち上げられ、」実際はそうではないにもかかわらず、とてもそれが偶然だとは「見えなくなったり、あらかじめわかっていたように思えたりすることだ。グーグルの驚くべき成長も 9・11 も黒い白鳥である。宗教の台頭から日常生活まで、ほとんどすべての背後には黒い白鳥が潜んでいる。だが、実際に起こるまで黒い白鳥という現象に私たちが気づかないのはなぜだろうか?」(カバー)この謎を解き明かしてくれている。それは「科学が導き出した結論のいくつかは、めったに起こらないことが与える効果を過小評価(あるいは完全に無視)している」からである。だからそのような結論は、「現実の世界では使い物にならない」という(上・52 頁)。金融工学を駆使した証券化商品はまさにめったに起こらないことを過小評価していたので、金融危機を予見できなかったわけである。「私たちには政治や社会や天候がはっきりとは予測できない」(下・204 頁)。タレブは「私は黒い白鳥が大嫌いで、それ以外のときは黒い白鳥が大好きだ。人生に機微を与えるランダム性やよい方の偶然、画家のアペレスの成功、ツケが回ることのないありがたい贈り物は大好きだ」(下・214~5 頁)という。世の中分らないことだらけである。分らないから面白いわけである。

たまたま また、数学、統計学的に問題を整

理している、レナード・ムロディナウ著、田中三彦訳『たまたま 日常に潜む「偶然」を科学する』ダイヤモンド社、2009 年もそのような指向をもった著書である。本書カバーに内容が要約されている。すなわち「なぜヒトは『偶然(たまたま)』を『必然(やっぱり)』と勘違いしてしまうのか?」これを解明した著書である。

ムロディナウによれば、人間は愚かしい判断をしがちだという。人間は何かをコントロールしていると感じたい、そうでないと落ち着かないようである。ところが人間の能力はそんなに良くできていない。そこに不調和が発生する。これが「われわれがランダムな事象をそうではないと誤解する主たる理由の一つだ」(275 頁)という。だから「偶然をコントロールできるという錯覚」(274 頁)を懐くのだという。偶然のチャンスに恵まれた経営者を賞賛し、かれが自らの力で成功をもたらしたと誤解することが多いという。人間は成功を目の前にして、いわば結果から逆算して、当初からそれが可能であったように思ってしまうものだという。リーマン・ショック以前、投資銀行の経営者に高額報酬が支払われていたが、実は「ある結果のうちどれだけが技量によるものでどれだけが運によるものかを判断するのは、やさしいことではない」(22 頁)。しかるに高額報酬そのものから、その能力を逆算して称賛に値すると考えがちであるという。「能力は偉業を約束してはいないし、偉業は能力に比例するわけでもない。だから重要なことはその方程式の中の別の言葉 - 偶然の役割 - を忘れないようにすることだ。」(320 頁)邦訳書の書名「たまたま」はそういうところからつけられている。人々がそれっぽい情報を目の当たりにして、いかに誤解しやすいかを科学的に論じている。

西欧的分析的志向の限界 従来の西欧的社会科学はしばしば、分析的であるといわれる。日本では結構総合的に物事を見る向きもあるが、欧米では分析的志向が優勢であるように思う。日本でも輸入学問は分析的である。近代経済学でもマルクス経済学でもそうだ。日本の経営学者、野中郁次郎氏などが「暗黙知」などを提唱するとき、いくら分析していった

も分からない問題が、ずっと分かってしまう場合があることを暗示している。このような考え方が出てくるのは、日本的東洋的だと思う。木を見て森を見ざる過ちなど西欧的分析的思考で考えると陥りがちである。ここで紹介したように、西欧でもこれを考え直そうという動きが見られる。ただ、著者たちは西欧でもマージナルなところが出自であるのも事実であるが。

実務の世界では また、西欧においても、理論の世界ではそうであっても実践の世界では、そういった人間の合理性の限界に目を向けている。ピーター・L・バーンスタイン、山口勝業訳『アルファを求める男たち』（東洋経済新報社、2009年）では、「動物に比べれば人間は極めて高い思考力をもってはいるが、困難な選択に直面したとき、我々はえてして冷静な分析と計算とは違う何かに支配されがちである。たとえば、多くの場合にみられるように、我々は合理的な判断をしたと本当に信じ込んでいるときでさえも、将来どうなるかは誰にもわからない。」（34頁）このようにリアルに現実をみている。「経済学は科学ではない。それを理解し、応用するとき、歴史は重要である」とアンドリュー・ローの言葉を紹介している（107頁）。さらに「多くのビジネス・スクールの教授たちは、あらゆる資産価値モデルは期待に関するものだということを忘れがちである」とシャープの懸念を紹介している（152頁）。CAPMが問題にしているベータもさることながら、誤差であるアルファに注目しないと、実際には儲からない。気の利いたファンド・マネジャーはそこに注目するわけだ。レバレッジを過度に活用しすぎた投資銀行、ヘッジ・ファンドの失敗が今回の金融危機を招いたので、今後はプライベート・エクイティ業務が拡大していくだろうといわれている。ウォーレン・バフェットのような投資家も近代的ファイナンス理論より原始的な投資手法で勝ち続けている（リチャード・ゴールドバーグ、田村勝省訳『ウォール街の崩壊の裏で何が起こっていたのか？』一灯舎、2009年、292頁）。現実複雑である。

理性の限界

若いとき、合理的思考に惹きつけられていた頃には、気づかなかったところに、最近ようやく関心を持たされるようになったというのが正直なところだ。上記「暗黙知」の基礎に東洋的な知恵があるのではないかという思ひは、儒教や仏教を再度学び直すとき、感じさせられている。またハイゼンベルクは講義録『物理学と哲学』（1955～56）のなかで「第二次世界大戦以降における物理学の日本の大きな貢献は、おそらく、極東の伝統的哲学思想と量子理論の哲学的本質との間に、ある種の近縁性があることを示唆している」（玄侑宗久『般若心経』筑摩新書、2006年、97頁）という。そこで、仏教関係書をひもといてみたいと思う。言われているすべてが正しいとか言うわけではないけれど、そこに読み取るべき言葉を発見する。

入門哲学としての仏教 竹村牧男『入門哲学としての仏教』講談社現代新書、2009年、は次のように述べている。今日「キリスト教やマルクシズムといった精神的・文化的一元的価値が崩壊し、思想・価値観の多元化が進んできた。絶対というものはなくなったという、ポスト・モダンといわれる状況である。」（242頁）「精神的・文化的一元的価値の崩壊は、ほぼ、人間の理性に対する過度の信頼の末の問題である。一方、新たな経済的・制度的一元的価値すなわち競争原理も、……アトム（原子）的個人観、効率至上にもとづくもので、やはり人間の理性（合理性）への無反省な信頼にもとづくものである。要は、人間の理性への過信が、今日の種種の問題を生みだしているといえよう。人間の理性への信頼の過程を近代化といえ、現代は近代化のもたらした種種の矛盾が噴出している時代だと言える」（243頁）。こういう主張に共感するところ大である。仏教では縁起、つまり関係の中ですべてをみる。六相円融義の縁起観を紹介して言う。「1本のたるきが家という全体である……。いわば、構成要素の一つが、全体そのものだという」（200頁）。著者は「諸の構成要素の一つ一つが、それぞれ全体にほかならない、という。きわめて興味深い論理が解明されたわけである。部分は全体にほかならない。こういう論理は、単純な要素還元

主義をはるかに超えた、いかにも現代的な論理ではないか」(204頁)と述べている。

親鸞を読む 山折哲雄『親鸞を読む』岩波新書、2007年、にも興味深い指摘がある。「今日、……日本の社会において、公と私ということが西欧社会との対比において、よく話題となる。」(14頁)「われわれの社会では、『私』の中に閉じこもった『個人主義』の暴走が、それこそ『公共』の場においてかなり目にあまる状況になっている。公と個の関係がいつの間にか調和を乱し、不幸な関係を取り結んでしまっていたのである。どうしてそんなことになったのか。」「いろいろ原因は考えられるだろうが、わたしはその一つに、戦後六十年われわれはひたすら個、個人、個性、個の自立ということをしていい続けながら、その『個』の内容について具体的に問いかける努力をしてこなかったからではないかと」という(15頁)。従来の大和言葉を思い出すとき、個に類する言葉に「ひとり」という言葉をわれわれ日本人はもっていたことがわかる。「ひとり」という言葉は「千年の歴史をもっている」(16頁)という。「咳をしても一人」(尾崎放哉)、「鴉啼いてわたしも一人」(種田山頭火)その他が紹介される(17頁)。評者である私は、ここでの「一人」には、孤立していない、社会の中の一人の人間という感じを抱かされる。

この問題提起であるが、山折はこの点を必ずしもストレートに深めていない。むしろ親鸞の教えの中核部分を読み説き、近代人あるいは人間が陥りやすい窳(陥穽)へと論を進めているように思われる。つまり「悪人正機」、「他力本願」へと論を進めている。明治の近代人清沢満之も苦悩してややもすれば、「善人正機」に傾き、自力的妄念にからめとられているかにみえんとする(第4章弟子の目に映った親鸞 - 唯円と清沢満之 -)。これは近代人清沢に限らないのであって、親鸞の教えを聞き書きした「歎異抄」を著した唯円も「善人正機」に傾きがちであるし(第4章)、親鸞の妻惠信尼にすら「自力執心」がみられるとする(第7章惠信尼にきく)。ただしこう解釈するのは、山折を我田引水、

私が自分に都合よく利用しているのかもしれない。

親鸞は自ら「煩惱具足の凡夫」、煩惱でいっぱいの人間だと称し、しかも「火宅無常の世界」、不安に満ちた無情の世界にいると述べている。だからこそ、人間のすることはむなしいといい、自力の限界を知り他力本願に帰すべしという(松原泰道『仏教入門』詳伝社、2004年、205頁)。人間ややもすれば自力で何でも解決できると思ってしまうようである。ここでは先のムロディナウを思い出す。すなわち、人間は何かをコントロールしていると感じたい、そうでないと落ち着かない。ところが人間の能力はそんなに良くできていない。そこに不調和が発生する。人間の傲慢を自覚しなければならない。それをいま改めて感じさせられる。

親鸞教の歴史ドラマ ここで、私家版ではあるけれど、島田克美『親鸞教の歴史ドラマ 忘れえぬ著者たち』ライフリサーチプレス、2006年、でこのように言われていたのを紹介しておく。親鸞は他力本願とか「本願力にあいぬれば、むなしくすぐるひとぞなき」と言っていたが「今の世の中では、自力主義が流行しているようです。自己責任とも言われます。しかし、自分の思うようにならなかったことや、人からいろいろいわれたりしたことが、みな自分の至らなさや、努力不足のせいだと思わなければならないのでしょうか。」自力に限界があるにもかかわらず、責任をとらされるのではたまったものではない。ときに学生諸君から相談を受けて、無力な自分がそこにいることを知る。島田氏は「誰にも空しくない人生を送らせるのが仏の本意あるいは悲願なのだという一言を、心に刻んで、これが踏ん張りどころだと、考えたら、どういう世界が開けてくるのでしょうか」と言われている(216頁)。私には重い言葉だ。

HPを見て下さい。又何でも意見を。

皆様のご意見を歓迎します。HP (<http://www.finance.ritsumei.ac.jp/matsumura/>) もご覧下さい。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい (matsumura@mba.ritsumei.ac.jp)。